

2022 年度（令和4年度）学校評価自己評価表

校番 1	福山市立鞆の浦学園
最終更新日	2023年（令和5年）3月10日

Ⅰ 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の理念のもと、各中学校区・学校は「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ 自 校

前年度学校関係者評価の主な内容	
・学校が進めている取組内容については、概ね肯定的評価をいただいた。	
・開校4年目も、児童生徒の成長のため義務教育学校ならではの取組を積極的に進めていくことを期待される。	
ミッション	
義務教育9年間の一貫した教育を推進し、将来の日本やふるさと福山を支え貢献する人材を育成する。	
学校教育目標	
郷土福山を愛し、心身ともにたくましく意欲を持って主体的に学ぶ子どもの育成 ～ ふるさととの自然、人、歴史、伝統、文化に触れながら、学びをつなぎ深める ～	
現 状	
＜児童生徒＞	
・「ふるさが好きである」児童生徒の割合91.7%	
・「自分の考えは認められている」81.6%	
・次の4つの「育成する力」が身に付いている、深まっていると回答した割合	
「課題発見・解決能力」84.4% 「情報活用能力」88.2%	
「コミュニケーション能力」92.3% 「郷土愛」90.4%	
・福山ブランド「鞆学」では、子ども達は意欲的に学んでおり自分達のやっていることを積極的に発信する姿が多く見られた。	
＜授業＞	
・「学級は安心して学べる場である」90.6%	
・「学校での学びはよく分かる」89.4%、「考えることは面白い」77.5%	
・「意欲を持って学んでいる」84.0% , 「探究することが大好き」75.2%	
・前期課程の全学年で一部教科担任制を取り入れており、学習意欲の高まりが見られた。子ども達が将来の夢や志を見付けて、その可能性に挑戦し続ける教育内容と教育体制を更に進める。	

育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)		① 課題発見・解決能力 ② 情報活用能力 ③ コミュニケーション能力 ④ 郷土愛
めざす 子ども像	①	・物事を多面的に見たり、これまでの経験や知識を活用したりする中で、新たな課題を発見することができる。
	②	・多様な他者と協働したり、よりよい解決方法を選択したりすることで目的に応じた納得解を導き出したり実行したりすることができる。
	③	・多様な他者と互いに考えを認め合いながら、協働することができる。
	④	・多様な他者と協働することで新たな考えを創造し、適切かつ効果的な解を導き出すことができる。
研究	主題 内容等	「教科・学年の枠を超えた9年間の一体的な教育内容と教育体制の確立」
		続・「探究」の世界にどっぷりつかる！ ～「認知のしくみ」から個人テーマを設定し、学びの質を探究、実を追求する～
めざす授業の姿		・「なぜ?」「わからん、教えて!」「やった、わかった、できた!」「もっとやりたい!」などの声がする授業
		・考え、話し合い、そして学び合う、みんなとともに自信を育てる授業

学びの土台	
・学校と家庭の学習・生活を繋ぎ、全ての活動に根付く主体性と責任感	
・学園会作成の「幸せの道」を踏まえ、安心して学べる共感・支持的文化	

Ⅲ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立鞆の浦学園

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 以	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 以	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	夢と志を育み、可能性に挑戦するための意欲と学び続ける力を付ける。	★	見直し	児童生徒一人一人の学びを最大限に引き出し、一人一人が自らの伸びや成長を実感できる。	• 学びの質を深めるため、ICT機器やプロボノ等の外部人材を積極的に活用する。 • 「幸せの道」の取組内容を深めるため、学級、学園全体で絶えず議論・交流する。	• 学びの伸びや成長の具体物（作品や記録等）を学校内外に積極的に発信している。 • 児童生徒アンケート「学級は安心だ」「自分の考えは認められている」の肯定的評価85%以上	□外部人材を積極的に活用できている。「自分の作品を発信できた」76.2% □学期に2回、クラスで「幸せの道」について考える時間を設けた。肯定的評価「学級は安心」90.9%「考えは認められている」85.4%	4	4	• 外部人材の活用を推進し、児童生徒の探究心を高め、キャリア教育につなげていく。 • 学年の実態に応じて「幸せの道」の振り返りや見直しを常に行う。改善に向け、学級を越えて議論する場を設定する。	□外部人材やICT機器を積極的に活用し、学びや成長を発信した。「自分の作品を発信できた」82.3% □学園全体の「幸せの道」について学園会と委員会で話し合う時間を設定した。肯定的評価「学級は安心」91%「考えは認められている」91.9%	4	4	4	• 学びの質を深めるため、外部人材等を活用した教育課程を見直し、探究学習やキャリア教育につなげる。 • 児童生徒、学級の課題から学園会を中心にによりよい学園づくりについて議論し、自己肯定感を高める取組などを交流・共有する。
1	「ふるさと鞆・福山」への愛着と誇りを育み、より良い町づくりに貢献できる。	★	継続	より良い町づくりを、SDGsと関連付けて考え活動を選び行動できる。(自己選択・決定)	• ふるさとをテーマに課題発見・解決学習を進め、取組や学びを積極的に発信する。 • 一人学びと協働学びをバランスよく効果的に設定する。	• 児童生徒アンケート「ふるさと大好き」「SDGs達成に貢献している」の肯定的評価85%以上 • 児童生徒アンケート「探究大好き」の肯定的評価85%以上	□「鞆学」を中心に様々な活動を行っており積極的に発信できている。「ふるさと大好き」93.4%「SDGs貢献」89.0% □「探究大好き」80.3%学年によって差がある。	3	3	• これまでの取組を進めるとともにカリキュラムの課題を見直し修正する。 • 一人学びと協働の学びを進め、更に異学年で交流し互いに学び合う。	□「鞆学」を通して地域とつながりを深めることができた。「ふるさと大好き」92.4%「SDGs貢献」87.2% □チャレンジタイムを中心に異学年で学習する機会を作ることができた。「探究大好き」85.4%	4	4	4	• 地域とともに課題発見・解決、SDGsに関連付けた取組など、学んだことを積極的に発信・共有していく。 • 異学年・異分野の交流や地域を素材とした学びなどを活用し、自分で「決める・選ぶ・考える」主体的な学びを推進する。

1	「学校における働き方改革取組方針」を踏まえ、子ども達と共に自ら挑戦し続ける。	★	見直し	個人テーマを設定して自らの強みを活かし、年間を計画的に業務遂行する力を付ける。	・「学びが面白い」の深化をめざし、取組の質を高める具体策を実践交流・発信する。 ・定時退校日の推進と業務内容の改善を進め、見通しが持てる業務管理を進める。	・教職員一人一人がやりがい感を持ち自らの成長記録を手に入れている。 ・全職員が、時間外勤務1ヶ月45時間以内、年間360時間以内	☐ 個々の取組内容を教職員同士で共有し、指導主事に助言を仰ぐなど実践を進めている。 ☐ ほぼ全職員が45時間以内を達成した。年間360時間以内は62.4%。	4	4	・教職員が自らの取組の質を更に高める具体策を考え、実践交流・発信する。 ・次年度に必要な教育内容や行事を検討し、勤務時間内で最大限の教育効果とやりがいを追求する。	☐ 個人テーマの取組や成果を生かした学びづくりを行い、公開研究会等で発信した。 「成長につながった」 94.2% ☐ 情報提示の仕方を工夫し、自分に必要な情報を職員が把握できるようにした。 「45時間以内」 99.2% 「年間360時間以内」 84%	4	4	4	・教職員や地域、外部人材を活用しながら子どもの学びの成果、課題を情報共有し、本質的な問いに迫る日々の実践に活かす。 ・それぞれの学年や異学年で取り組んでいることを教職員や児童生徒も把握でき、つながりを次に生かせる仕組みづくりを行う。
---	--	---	-----	---	--	---	---	---	---	--	--	---	---	---	---

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。